

CEFR による言語能力の自己評価

中西 廣

日本大学

Abstract

The aim of this paper is to consider the contributions, problems and future possibilities of CEFR in self-evaluation on linguistic competence. CEFR brings language learners Can-do statements as indexes for evaluating their own linguistic competence and proposes a possibility to measure the ability to learn. However, Can-do statements could be lack of its grammatical function. In addition, it could be necessary to apply Can-do statements to learners who have different backgrounds. Teachers should coordinate can-do statements according to each learner. If CEFR is used rightly, it could possibly enable language learners to evaluate their actual linguistic competence.

1. はじめに

言語学習において、学習者自身が自らの言語能力を把握することは、重要である。自己評価は、辰野（2010）によれば、学習方略の中の「理解監視方略」にあたりと考えられ、学習者自身が学習目標を確立し、それらの達成程度を評価し、用いた方略を修正する一連の過程が、認知過程の制御に結びつくとしている。

実際に日本で広く普及する英検や TOEIC 等のような英語熟達度試験を例に挙げると、それぞれの評価視点の違いから試験形式が異なるのと同様に、評価方法も多様である。そのため多様なテストが存在することは、異なる視点から言語能力の到達度あるいは熟達度を測定できる一方で、複数のテストを受験する学習者にとって自己評価の指標にどの結果を用いるべきか迷ってしまう可能性も考えられる。

本稿では、日本でも『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠』（吉島他,2004）として翻訳されている Council of Europe（2001）が発行したガイドラインである“Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment (CEFR)”の自己評価表に特に注目し、言語学習者による言語能力の自己評価における CEFR

の貢献や課題を整理する。その後、言語学習者が適切に自己評価をおこない、それを利用して自律的学習者へと成長をするために、教師はどのようなサポートを施すことができるのかを考察する。

2. CEFR の概要と特徴

CEFR は、その基本理念として複言語・複文化主義を掲げ、多言語・多文化社会の中で生きる個人の態度を育て、ヨーロッパの協調を外国語によって促進する方針を示している。

また、言語学習者のレベルを「共通参照レベル」として下から「Basic User(A)」と「Independent User(B)」、「Proficient User(C)」の3段階に分け、それらを更に2つに分けることによって「Breakthrough(A1)」と「Waystage(A2)」、「Threshold(B1)」、「Vantage(B2)」、「Effective Operational Proficiency(C1)」、「Mastery(C2)」の全6段階に分けている。

言語能力については、「理解すること」「話すこと」「書くこと」の3つに重点を置き、「理解すること」を「聞くこと」と「読むこと」、「話すこと」を「やり取り」と「表現」に分け、それぞれについて行動中心主義を根拠として、Can-do statements (～ができる) という能力記述文で例示している。

3. 自己評価に CEFR を用いることによる貢献と期待

3.1. 能力記述文による言語を選ばない評価指標

まず、本稿で注目した言語学習者に対する CEFR の貢献は、能力記述文による自己評価表を提供したことである。言語学習者自身が具体的な行動ができるか否かを指標に、言語の種類によって制約を受けずに自らの言語能力を評価できる素材を提供したことになる。

大藪(2012)は、金沢大学で英語を学ぶ大学生を対象とした調査の中で、以下のように報告している。

「CEFR の Can-do 表を使うことによって、それぞれのスキルごとの学生の自己判断英語能力をより細かく見ることができた。スキルによって、レベルの違いが見られ、学生も Can-do 表を使うことにより、それぞれの語学スキルに関して、自分の得意分野や苦手分野をより具体的に把握できた。」(p.70)

また、坂野他(2012)が岡山大学で日本語コースを受講する留学生 86 名を対象におこなった調査によると、自己評価表を用いることで、学習者は自身の言語能力の伸びを自覚していることが確認されたとしており、短い期間で学習者は自らの言語能力の伸びを意識できたという。加えて、その実態を教師が知ることであれば、授業を行う上で有益だろう

とも述べている。

今後、他言語の学習者にも自己評価表の普及が進めば、学習者が少ない言語でも、広く普及している言語との比較ができる可能性もある。また、教師の視点から、自己評価の結果を有効的に活用できれば、到達目標の設定や授業デザインへの応用が期待できるとも考えられる。

3.2. 自立的学習の視点

次に、CEFR (2001,p.106) の第5章1節4項において「学習能力」(ability to learn) を言語使用者・言語学習者の一般能力の一部として提示していることに注目する。

Mariani (2004) (モロウ編・和田他訳,2013) は、CEFR が方略を使用者が自由に選択できるようにすることによって、明確に系統的に行動することを直接奨励はしていないものの (p.56)、CEFR 第4章第4節のコミュニケーション言語活動の一覧表と能力記述文に方略の理論的枠組みが取り込まれており、学びが生涯を通して順応し変化する能力を含んでいることを指摘している (p.51)。

このことから CEFR の自己評価表では、言語学習を学校教育制度の中の「科目としての英語学習」よりも広い視野でとらえ、言語学習・言語教育を生涯学習・生涯教育により近いものとして捉えていることがうかがえる。CEFR の効果的な利用により、言語学習者は自己評価を通して、自らがどの程度学習者として成長できているのかも確認することができると可能性がある。

4. 自己評価に CEFR を用いる課題

4.1. 能力記述文中の文法概念の省略

CEFR を自己評価に用いる際に挙げられる課題の1つは、Keddlé (2004) (モロウ編・和田他訳,2013,p.64)によると、「文法ベースによる進歩を測定しないために、CEFR の到達度指標と学習者が実際にできることとの間に壁が生じてしまう」ということである。その上で、あまり多くみられない「未来」についての能力記述文が追加されれば、使いやすさがさらに増すことを提案している。

文法概念を CEFR 到達度指標から読み取ることが難しいと、教師が CEFR に基づくコース・シラバスを作成する際に、CEFR とシラバスに齟齬が生じることが考えられ、そのシラバスに基づく授業を受けた学習者が自己評価する際にも当然適切な評価ができない可能性があるだろう。

4.2. 言語環境の違いにおける CEFR のとらえ方の違い

英語という主に一つの言語に対して CEFR の利用が注目されている日本の現状は、柳瀬

(2007,p.69)によると、「排他的バイリンガリズム」の態度を助長しかねないという。また、拜田(2010,p.9)が指摘するように、CEFRの解釈・導入については、「機能主義的な道具論的言語観への傾斜」が問題視されている。自己評価においても、CEFRの根底的理念である複言語・複文化主義の考え方を自己評価のプロセスの中にどこまで、どのような仕組みとして反映させるのか、また日本の言語環境を前提として、複言語・複文化主義を推進すべきなのかの検討も必要であろう。

5. 自己評価の可能性

今後、言語学習者と教師がCEFRとどのような関係性を築くべきかについては、その概念を図式化したものを図1に示す。

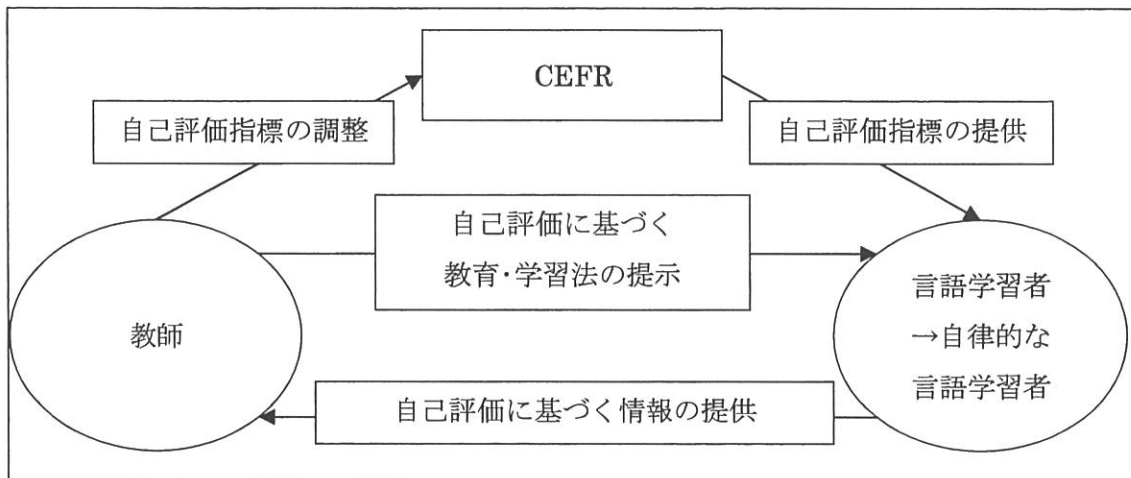


図1. CEFRを媒介とした言語学習者と教師のあり方

言語学習者は、CEFRの能力記述文による自己評価表を用いて自らの能力を評価することによって、言語能力の分析視点がテスト以外にも増えることになるだろう。とりわけ、学習方略の視点から学習プロセスそのものを見つめ直す機会となるかもしれない。ただし、渡部(2013)が上智大学のフランス語科でおこなった調査によると、成績が高い学習者がより過小に自己評価することも指摘されている。正しい判断が可能になるための評価指標は、教師がCEFRやその能力記述文について利点と課題についての理解を深め、学習者に合わせて評価指標を調整することが必要になるだろう。その上で、自己評価の結果を、教師をはじめとした言語教育者が咀嚼し、それに基づいた言語学習をサポートすることは、学習者にとってより有益になるだろう。

個人の能力に適合した細かな指導は、教師が学習者から信頼を得るためにも必要であろうし、学習者の不安を取り除いたり、学習意欲を増進させたりすることにもつながる可能

性がある。一方で、自己評価の結果の解釈には慎重さも求められるだろう。

6. 今後の研究課題

最後に、今後の研究課題について検討する。本稿は、複言語・複文化主義を理念とした CEFR を用いた言語学習者の自己評価の可能性について述べてきた。しかし、焦点を当てた言語は非常に少なかった。言語横断的な視点からの検討は今後の研究に向けた大きな課題であり、今後は本稿で整理した内容について更なる研究を重ねていく予定である。

7. まとめ

言語能力の自己評価について、多様な言語を比較可能にするための工夫として、CEFR が能力記述文を採用していることや、学習者の自律にも目を向けていることを確認することができた。これは、多様な言語に触れる機会が増えるにつれて、学習者が自らの言語能力、特に学習者が少ない言語についての能力を証明したり把握したりする可能性も考えられる。さらに発展すれば、日本でも英語以外の多様な言語に目が向けられるようになり、福田他 (2010) が提案するように、日本の教育制度の中で、様々な言語に触れる機会を提供する外国語教育の在り方へとつながっていくかもしれない。さらには、単一言語だけを学ぶよりも複数の国の言語や文化に興味・関心を持つきっかけになり得る可能性もある。その後、英語を学習する際に、「複言語の一つとしての英語」という意識で学習することも期待できる。言語学習者が言語横断的視点に立つことにより、言語が平等に評価され、多言語・多文化社会への関心が深まり、社会活動がより幅広く展開されることによって、グローバル人材としての真のリテラシーを身につけられる可能性も期待できるかもしれない。

一方で、文法概念の記述が省略してあることによって指標としての包括性が問題視されていることにも留意したい。言語構造の違いから文法学習を避けて通ることができない日本の英語教育で、CEFR の自己評価表を使用する際には特にこの点に留意する必要がある。

教師を始めとした言語教育者が EU の置かれた環境の下で作成された CEFR を日本で使うために正しく理解し、誰がどのように使用するのかを認識したうえで、必要な調整を加えながらその使用を促していくことが必要だろう。この点を考慮すれば、CEFR はいくつかの留意する側面を持つものの、その貢献や期待を損なうものにはならないと考えられる。

参考文献

大藪加奈 (2012) . 「CEFR を使った英語力および授業に関する学生アンケート: 金沢大学のアンケート結果より」『外国語教育フォーラム』6, 63-77.

- Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kedde.J (2004). 「1.CEFR と中等学校用シラバス」 キース・モロウ編・和田稔・高田智子・緑川日出子・柳瀬和明・齋藤嘉則訳 (2013)『ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) から学ぶ英語教育』東京: 研究社.
- 辰野千壽 (2010).『学習方略の心理学』東京: 図書文化社
- 拝田清 (2010). 「日本の外国語教育における複言語主義導入の妥当性」『言語教育研究』1, 1-12.
- 坂野永理・大久保理恵 (2012). 「CEFR チェックリストを使った日本語能力の自己評価の変化」『大学教育研究紀要』8, 179-190.
- 福田浩子・吉村雅仁 (2010). 「多言語・多文化に開かれたリテラシー教育を目指して—日本の小学校における言語意識教育の提案—」細川英雄・西山教行編『複言語・複文化主義とは何か ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』東京:くろしお出版.
- Mariani.L (2004). 「2.CEFR を用いて学び方を学ぶ」キース・モロウ編・和田稔・高田智子・緑川日出子・柳瀬和明・齋藤嘉則訳 (2013).『ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) から学ぶ英語教育』東京:研究社, 46-59.
- 柳瀬陽介 (2007). 「複言語主義 (plurilinguatism) 批評の試み」『中国地区英語教育学会研究紀要』37, 61-70.
- 吉島茂訳・編・大橋理枝他訳 (2004).『外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』東京:朝日出版社.
- 渡部良典 (2013). 「ヨーロッパ共通参照枠 (CEFR) からみた上智大学外国語学部学生の複言語能力自己評価」『上智大学外国語学部紀要』47, 211-234.